

## 66 中神琴溪と永富独嘯庵の頻用方剤から考える古方派の本質

桑谷 圭二

くわたに内科

【緒言】古方派の定義は定かではないが、『傷寒論』と『金匱要略』に多大な影響を受けた漢方流派であることは間違いない。しかし現在では曲解され『傷寒論』『金匱要略』の方剤を使用する漢方流派と誤解されている懸念がある。今回古方派と考えられている永富独嘯庵と中神琴溪の頻用方剤を比較することにより古方派の処方傾向を検討することにした。

【永富独嘯庵と中神琴溪】永富独嘯庵は1732年3月10日に生まれ、山脇東洋に師事。奥村良筑にも師事し吐方を学ぶ。山脇東洋にその才能を最も愛された弟子の一人であるが、わずか35歳で夭逝した。中神琴溪は1744年(誕生日不詳)に生まれ、30代後半から医を志したとされ、六角重任の『古方便覧』を読み発奮。吉益東洞の著作を筆頭に多くの書物を読み漁りほぼ独学で一家をなしたとされる異彩を放つ漢方医である。琴溪は独嘯庵とは対照的にその当時としては驚異的な90歳という長寿を全うした。独嘯庵と琴溪には直接の接点はない。独嘯庵が亡くなった1766年4月13日時点で中神琴溪はまだ20代であり医業に関与していなかった。しかし二人を繋ぐ人物がいる。それは吉益東洞である。吉益東洞は永富独嘯庵を「陰たる一敵国の如しとは永富氏か、吾死せば將にこの人をもって海内医流の冠冕となすべし」と評しているのに対し、独嘯庵は吉益東洞を「豪傑の勇ありて、豪傑の知なし。その古医方を自任するは藥狐の祥なり」と評し東洞を切り捨てている。一方中神琴溪は吉益東洞に私淑し著書の端々に尊崇の念を述べている。つまり二人は東洞に対する評価が180度異なることになる。そこで二人の頻用方剤とその傾向に違いがあるのかを確かめるためその代表作である永富独嘯庵の『漫遊雜記』と中神琴溪の『生生堂治驗』から症例を抽出して検討した。

【方法】永富独嘯庵の著作『漫遊雜記』から46例、中神琴溪の著作『生生堂治驗』から88例を抜粋した。両書には多くの治験例が掲載されているが、一般論後の簡単な記載や、独嘯庵と琴溪が直接関与していない症例を除いて選択した。一つの治験に複数の方剤が掲載されているものはその全てを取り上げ、特定処方に生薬の去加がされているものは別の処方として数えた。また方剤投与により悪化しているものもあるが、効果の有無にかかわらず抽出している。また主方と兼用方や病勢により1回だけ使用した方剤などもあるが全て同等のものとして取り扱った。二人の治験はこの2書だけで、症例数も異なるため本来の方剤傾向を活写していない可能性があることを十分に認識している。さらに独嘯庵も琴溪も薬方のみならず鍼灸や外科処置等を併用しているが今回は薬方だけに焦点を絞った。また著書という性格上記載するに値しない一般症例は除かれているものと考えられるがそれに対しては考慮していない。

【結果】永富独嘯庵の上位10処方 は瀉心湯・瓜蒂末・三黄瀉心湯・参連湯・三聖散・葛根湯・参連白虎湯・大承気湯・二仙散・附子粳米湯であり、中神琴溪の上位10処方 は龍門丸・瓜蒂散・浮萍加大黄湯・桃花湯・浮萍湯・桃核承気湯・七宝丸・赫赫丸・吹鼻散・柴胡加竜骨牡蠣湯であり吐方を得意とした2人を象徴するように瓜蒂末と瓜蒂散は同じような病態に使用したことが推測されるが、共通する処方はない。また『傷寒論』と『金匱要略』以外の方剤も頻用していたことは明白である。

【考察】古方方剤とは『傷寒論』『金匱要略』出典の方剤と定義して差支えないと思う。しかしながら古方派とは古方方剤を使用する一派ではない。それを証拠に古方本流と目される吉益東洞の治験録には多くの古方方剤以外の使用例があるし、その脈流の方剤運用は決して古方薬剤に偏っていない。では古方派の定義は何かと問われると難しいが名古屋玄医が「張仲景の法に従うも張仲景の方に縛せられず」との言葉にその答えがあるような気がする。